

山に登るように、絵を描くこと

安河内宏法(京都工芸繊維大学美術工芸資料館特任助教)

山に登ることと、絵を描くことは似ている。ここで言う絵とは、あらかじめプランが綿密に決められ、そのプランに従って描かれる絵のことではない。支持体に筆を落とし、支持体から離れ自らの描いたイメージを確認し、再び支持体に筆を置く。このようにして画家が行くあたりわからないままに絵を描くとき、その制作プロセスが、先の見えぬままに歩み行くといつしか頂上にたどり着いている登山に似ていると思えるのだ。

登山と絵画制作の相似はしかし、必ずしも厳密なものではない。途中で頂上の位置を把握できないとしても、山の頂上は動かない。絵は、そうではない。画家は自らの筆の動きによって、頂上を作り出す。表現する主体としての画家がいて、その視線の先に完成した作品のイメージがあるという安定した二分法は端から存在しない。混沌とした中から何がしかが次第に練り上げられていくようにして、作品にとっての頂上は生起する。

だが、来田広大の作品を題材にするとき、こうした差異を確認してもなお、登山と絵画制作の類縁性に拘りたい誘惑に駆られる。それは、来田が山を描いているという理由のみに拠るのではない。重要なのは、彼の作家としての態度である。たとえば彼には、会津磐梯山や比叡山の頂上から見える周囲360度の風景を描いた絵画作品がある。あるいは、『Boundary』や『On the rooftop somewhere』と題された、山や市街地などで来田自身が絵を描く様子を映した映像作品がある。前者の絵画作品で彼は、タイトルで『周囲360度の風景を描いた』と示唆しながらも、風景の全てを描いていない。人は周囲360度の風景を一度に経験することができない。だから彼は、頂上から見える風景を彼の目が捉えられる範囲に限定して描く。一方の映像作品においても、彼は、山や市街地の風景の広大さと彼自身の絵の対比を映し出す。そこで彼は、自らの行為の小ささを隠さない。

来田の態度とはこのようなものである。彼は、山・風景・都市集合的な記憶といった大きな広がりのある対象を取り上げつつも、それらを自らの認識に収まる範囲まで矮小化することはない。我々が山に登るとき、山を俯瞰できないもの、一歩一歩歩みを進めるほかはないものとして経験するのと同じ仕方で、来田は自らが作家として取り扱う対象と向き合っているのだ。

本展「流れ山 Flowing mountain 来田広大個展」において、来田のこうした態度は、これまで以上にいきりと表れることになる。来田は会期中、ギャラリーの床面に山のイメージを描き続ける。イメージが生成消滅していく以上、そして床面にいっばいに描かれる以上、鑑賞者が来田の描くイメージの全貌を捉えることは、原理的にできない。でも、それでいい。山とは、そのようなものとしてしか経験できないからだ。いや山だけではなく、世界とは本来、そのようなものとしてしか経験できないものなのだ。だから、来田の実践は、ひとつの回答となる。世界がどのようにあるのか、我々は世界をどのように経験しているのかという問いに、来田は山を描くことによって答えているのだ。

流れ山 Flowing mountain 来田広大

あなたと私、向こうとこちらとの間には距離や認識の差異が存在することを予め理解した上で、鳥瞰図のような山の上を歩いて行く。

私はこれを「富士山」と認識して描くが、人はそもそも山だとも思わないかもしれない。

その「山のようなモノ」を目の前にしたとき、あなたは何を想い描くのだろうか。

昨日見た海の波しぶきかもかもしれない、遠い昔に体験した雪山登山の景色かもしれない。

何かに想いを馳せながらそれぞれの記憶を辿り、足跡を残すように場に介入していくことは、定着した固有のイメージを改めて捉え直し、その像を更新していくことではないだろうか。

万物は常に流動するように、イメージも変容し、風景の中に新たに地図が描き加えられる。床の上の絵画が、個々の記憶の中のイメージを供給し、とめどなく拡がるそれらを納める器のように、そして、あなたと私の境に存在するものを示唆するように、空間の中で機能することを願う。

私は、土地、場所と人との関係を俯瞰的に探るために山をフィールドワークの拠点とし、そこから臨む風景を地図として捉え、今ここにいるという意識を立ち上げさせることを作品制作の基軸としている。

現在、人の存在と強く結びつけられた「場所」の意味が大きな変容を遂げようとしている。

「場所」や「記憶」、「領域」や「地図」をめぐる問題について考えるとき、私はそこに介在する「視線」に着目することを促すために、ある種の「境界」とされる領域からの眼差しによる俯瞰的な地図を、イメージとして顕在化させることを試みる。

そのイメージは、周囲との関係や自らの立ち位置をも俯瞰的に捉えることを可能にし、世界との距離、また関わり方を確認することに繋がるのではないだろうか。

手掛かりとして、点と点を繋いでいくように、土地と人との狭間にある「記憶」を辿り、線を引いていく。山道を一歩一歩と登り徐々に視界が開けていくように、いつしか私と世界との関係性の地図が見えてくる。

来田広大

一九八五年兵庫県生まれ。二〇〇六〜〇七年にメキシコ留学。二〇〇八年に東京藝術大学絵画科油画専攻卒業。二〇一〇年に東京藝術大学大学院美術研究科油画技法材料修了。二〇二二年より京都造形芸術大学大学院芸術研究科助手。

おもな個展として、2014年『FUGAKU HYAKKEI』(ギャラリー 昨明 福嶋)、『2013年』『Birds-eye view』(ギャラリー パルク 京都)、『2012年』『Drawing birds-eye view』(MU東心斎橋画廊 大阪)、『2011年』『来田広大展』(ギャラリー 昨明 福嶋)

おもなグループ展として、2015年には「視界の先、視線の場所」(京都造形芸術大学ギャラリー オープン)、『これからの、未来の途中』(京都市立芸術大学美術館 芸術資料館)、『2014年』『Art Point Iwaki』(福嶋)、『見ゆる、描くこと』(東京藝術大学美術館)、『2013年』『Art meeting 2013 / 田入の森』(福嶋)、『機軸東京』(HIGURE 17.15 cas, 東京)、『2010年』『Waki Art Action』(2010) (福嶋)、『2006年』『rakawa Art Action 2009』(東京)、『2007年』『メキシコへの道』(ギャラリー 昨明 福嶋)、『2006年』『大展』(Garros Galeria・スペイン)、『

受賞歴として、2012年に「紙技百藝2012 大賞」(雅景維SAAS・京都)、『2008年』『O氏記念賞(大橋賞)』(東京藝術大学卒業制作展)、『シチズンストリート』、『2009年』『赤倉アカリョーベン』、『シチズンズ2009』(赤倉温泉・新潟)

本展は来田広大に於いてギャラリーの床に直接描かれた「山(富士山)」をメイン作品として構成されます。この「山」のこのような「鑑賞者の介入」によって日々変化します。そして、来田はその変化を受けて会期中、自身の山のイメージを描き足しつつも抑す。

ギャラリー入口ロビー部分特設
《FUGAKU HYAKKEI - drawing》 1940×1620mm キャンバスに黒板塗料、資料(Google Earth)・チョーク 2014

流れ山 Flowing mountain

来田広大
kita kodai